

自主調査研究報告 [完了報告]

離島観光客の入り込み構造の分析と制約要因 への対応に関する調査研究(継1B-1-②)	大分類	継1B
	中分類	継1B-1

1. 目的

本研究は、平成20～24年度に実施した自主研究「北海道の離島観光における港湾利活用に関する調査研究」の結果を踏まえ、観光客流動の実態と交通に関する制約要因とその影響を把握し、観光振興に向けた検討材料として資することを目的とする。

2. 実施内容

①利尻島、礼文島における入り込み状況や交通制約、地域資源等を含めた観光構造の把握、
②3か年にわたる本研究の総括。

3. 主要な結論

3.1 利尻島・礼文島に関する調査研究

利尻島、礼文島の現状と、観光振興に向け考えられる主な課題を以下に整理する。

(現状)

- ・利尻島と礼文島は日本の最北の海にある島々である。利尻島は日本百名山の一つに選ばれた利尻山、礼文島は高山植物が咲く希少な島であり、いずれの島も本土のサロベツ原野とともに「利尻礼文サロベツ国立公園」に指定されている。
- ・観光入込客数は減少傾向にあるものの、道内離島において、利尻島は1番、礼文島は2番目に入込数が多く、年間10万人を超えている。そして、道外客の比率が道内他の離島と比べて高いという特徴がある。

(課題)

- ・欧米人の中で価値を見出す人が多い国立公園、トレッキング、自然の観光対象を生かし、両

島で既に進められている誘致活動や人材育成。

- ・外国人観光客や島民のストレス軽減に寄与する外国語案内や情報発信の検討。
- ・高い割合を占める団体旅行客、増加傾向にある個人旅行客や外国人客など、多様な客層やニーズに対応できる観光メニューや食事、サービス等の開発。
- ・稚内などの周辺地域を含め、広域周遊や滞在期間の伸長と、その実現に向けた連携強化。

3.2 研究の総括

本研究は、道内5離島を大きく3つの地域に分け、各年度1地域ずつ重点的に調査を進めた。各島に共通して言えることは、担い手や資金の不足、人口規模の低下、高齢化率の上昇が顕著であり、加えて交通利便性の低さという障壁を抱えている。しかし、いずれの離島においても地域地減を生かした新たな取組や離島間連携のほか、地元の民間企業の積極的な展開などがみられ、今後の展開が期待される。

観光業をとりまく環境は刻一刻と変化している。例えば、外国人観光客の全国的な増加にともなうニーズの多様化、宿泊施設数や魅力的な観光メニューの開発、交通利便性の向上など求められるものは非常に多く、変革期といえるだろう。

4. 最後に

本研究は限られた成果の蓄積であるが、今後、離島振興や観光振興の一助となることを期待する。

本研究の遂行にあたり、道内離島関係者各位より貴重なご意見や情報をいただいた。ここに記し、深く感謝の意を表する。